

●春日部市民文化講座（第 27 回）

「文禄、慶長の役と利休の侘茶 ー高山右近の文禄、慶長の役を考察するー」

◆日時：2018 年 9 月 26 日(水) 10 時（ぽぽら春日部 4 階会議室）～12 時

■朝鮮半島での戦争の歴史を考える

今日のテーマは、ぼくが 20 年来ずっと高山右近がらみで、戦国時代、宣教師が入ってきた時代、そして秀吉の時代の中で調べていく中が辛かった内容です。それは**朝鮮半島と日本列島の為政者の対立**です。朝鮮半島は日本に一番近い国ですので、「文禄・慶長の役」の前にも、飛鳥時代の 663 年に「白村江の戦い」があり、唐・新羅連合軍に滅ぼされた百濟救済のために倭国が援軍を送って戦争を行ったという事実はありましたが、未だに解明していないところもありますし、なかなか真実が分からない、調べていても曖昧なところが多いのです。今日、これからお話しする「文禄・慶長の役」についても、調べている学者によって言い方も違うし、ぼくが調べていてもはっきりしない部分があるのです。この「文禄・慶長の役」というのが、日本の歴史にとっては大きな変わり目だったように思います。慶長の役の最中に秀吉が亡くなり徳川時代になりました。明治を迎えて列強に追いつけとイケイケどんどんとなり、軍国主義になって朝鮮半島の人々にとって大変無礼なことを我々日本人はしたのですね。それが植民地政策でした。名前まで日本名に改めさせるというようなこともさせたのです。炭鉱などでの労役にも朝鮮の人たちを連れてきて劣悪な環境の中での労働を課したりしました。世界文化遺産に登録された軍艦島でも、朝鮮の人たちが穴掘りを強いられました。太平洋戦争末期には、長野市に松代大本営地下壕が掘られましたが、そこで従事したのが朝鮮人労働者でした。そういう歴史があります。そして、ぼくの小学校時代に「**朝鮮動乱**」と呼ばれた「朝鮮戦争」がありました。1948 年に朝鮮民族は 2 つの国、大韓民国(韓国)と朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)に分断され、朝鮮半島の主権を巡って 1950 年に北朝鮮の兵士たちが中華人民共和国とソビエト連邦の支援を受けて韓国に攻め入ってきたのです。それに対してアメリカを中心とした国連軍が日本の横田基地から飛び立ったのです。朝鮮全土が戦場となって多くの犠牲者が出ました。

■平和の大切さ

そういう歴史がつい最近あって、今、韓国の**文在寅**(ムン・ジェイン)大統領が北朝鮮に行って大歓迎されました。テーマは「**南北統一**」です。ぼくは率直に言ってこのことは喜んでます。イエス様が言われたように「幼子のようにならずば、神の国に行くあたらず」とね。でも、ああいう為政者が単純にそれをやっているかという、そうでもないかもしれませんよ。ぼくは 16 歳でイエス様の平和の福音を知ってから、やっぱり平和って大切なあ・っって自分自身の人生で思います。率直に隣国が平和であって欲しいと思います。何で「文禄・慶長の役」の話をしたかという、今、朝鮮半島で南北統一に向けての動きが始まったということもありますが、日本人が朝鮮の人たちにしてきたことを皆さんと一緒に考えたいからです。

■その時、高山右近は？

今日のテーマは「**朝鮮半島の陶磁器 文化と茶の湯を考える**」です。「文禄・慶長の役」での戦の立役者がキリシタン大名の**小西行長**と、猛将の**加藤清正**なのです。この二人が秀吉の命で朝鮮半島に最大で 16 万人の兵士を引き連れて渡った二人の総大将です。文禄の役では 16 万人、慶長の役では 14 万人が朝鮮半島に渡り、そんな精度の良い鉄砲を大量に持っていったのですからどんどんと進軍していくのです。その時、**高山右近**は何をしていたと思います。実は、高山右近は前田藩に居て教会を 3 つとか 4 つ造っていたようです。高山右近は金沢で優秀な経歴を持つ客将として、前田利家の長男・利長(としなが)に厚遇されて過ごしていました。利家から「高山右近を大切にしなければならぬ」と言われていたのです。だから尊敬され、キリシタンの洗礼を受ける人たちが沢山いたのです。前田藩の重役の奥方はみんな洗礼を受けていたようで、女子修道院もできるくらいだったので。関ヶ原の戦いの後、小西行長は石田三成方について斬首され、お家断絶になるのですが、小西行長の家臣で合った内藤如安を高山右近が金沢に呼んで召し抱えるのです。そして、内藤如安も高山右近と一緒にマニラに国外追放されるのです。でも、如安の妹さん内藤ジュリアはマニラで女子修道院を造るのです。

■高山右近の愛

金沢時代の高山右近は、本当にイエス様に仕え、隣人を愛して自分自身をリスペクトし、大切にすること、茶の湯を通して学んだのです。ただ、その痕跡はほとんどが消されてしまっているのです。小説家の加賀乙彦先生は、戯曲・オペラで「高山右近」を書いているのですよ。何回か上演されていて、ぼくもお招きいただいて見たのですが、その冒頭の場面がマニラに着いた高山右近が怒り狂っている場面だったのです。その怒りが何だったかというと、当時、マニラ、フィリピンを支配していたのがスペインだったのです。そのスペインからマニラに来ていた

一部の宣教師たちの横暴振りを見て、高山右近が怒りを顕わにする場面から始まるのです。とてもショッキングなスタートなのです。これは傑作でしたので、あとで加賀先生に聞いたのです。「何であのような怒りの場面から始めたのですか」と。そうしたら加賀先生は、「ぼくはこれを書くために何回も何回も当時のスペイン人によるフィリピン支配の記録を調べて、それを知ったら高山右近が怒らない訳がないでしょう」と仰っていました。

■小西行長論を書くために

はこの夏に小西行長論を書いて、教会でずつと出していたのです。でも、誰も読んでくれなかったのではないかと思います。毎週出していたのですが、残念ながら誰一人として面白いねと言ってくれた人はいませんでした。今年は韓国に行きましたし、肥前の名護屋城（現在の佐賀県唐津市の）にも行って来ました。城下町が凄いです。資料の巻末に「名護屋城跡と陣跡めぐり」というパンフレットを付けましたが、城の近くに子飼いの武将たちの陣屋があり、遠くなるに従って秀吉と距離のあった大名の陣屋があることが分かります。日本全国の大名たちが名護屋城に集まった時に、高山右近は何をしていたかという、前田利家の客将、重要な存在として前田家の陣中にいたのです。しかも、その時に秀吉と一緒にお茶を飲んでいるのです。皆さんは知らなかったでしょう。その筈で、これには根拠がないので



「名護屋城跡と陣跡めぐり」より

らなかったでしょう。その筈で、これには根拠がないのです。状況証拠から見る高橋説ですからね。

■小西行長

小西行長のお父様・小西隆佐は、同じキリスト教徒で堺の商人でした。ですから、小西行長も商人として育っていたのですが、宇喜多家に出入りしていたことから才能を見出されて武士になったのです。そして秀吉にことのほか好かれた人なのです。天正 12(1584)年に高山右近の勧めで洗礼を受けてキリシタンとなり、天正 13 年には舟奉行を任じられて水軍を率いて小豆島 1 万石、さらに天正 15 年には九州平定で功をあげ肥後の国で 20 万石、天草 1 万石などを所領としました。天正 15 年にはバテレン追放令で改易となった高山右近を小豆島に匿ったりしている人なのですね。

■釜山から対馬・壱岐・博多へ

韓国では最初に釜山に行き、次が対馬へ行き、宗家が治めていた場所を見て、壱岐に行きました。壱岐は松浦鎮信(まつら しげのぶ)が治めていました。松浦藩は肥前国平戸藩初代藩主で、水軍の元締めですね。この松浦鎮信は戦国時代から江戸時代に生きた人で初代の藩主なのですが、4代目の松浦鎮信という殿様が若い頃から茶を好んで、片桐石州に師事して皆伝を受けて鎮信流という茶道の一派を興しました。現在でも、この鎮信流がありますし、松浦家の殿様が今でも家元を継承していますね。対馬の宗家は江戸時代まで続きます。宗義智(そうよしとし)は「文禄・慶長の役」の立役者で、小西行長と一緒に朝鮮半島で戦っているのですね。まさにキーマンです。そして、日本や朝鮮におけるさまざまな情報ネットワークを持っていた人なのです。

■経済の中心が堺から博多へ

それまでの貿易や商業の中心は堺だったのですが、この時代になると戦争の基地が博多になったので、貿易と商業の中心も博多に移りました。名護屋城ができて商人たちが集まって、彼らが富を集めるのです。そうすると、経済の中心地も移ってしまったのです。ですから、博多の商人たちの茶人たちから有名人になっていくのです。織田信長が堺を大切にしたのは商業都市であり、彼らが経済のリーダーだったからです。秀吉も堺を大切にしていたのですが、文禄と慶長の役を境として**博多にも経済の拠点**を作ったのですね。徳川家康の時代になって、朝鮮通信使が確立したのです。今回の旅で、朝鮮通信使歴史館で韓国語と日本語で説明された資料を見付けましたが、「我々の朝鮮は凄い。なぜならば徳川家康が我々をいつも迎えて、対等に話し合っただけで私たちの国の役人たちはもてなしを受けて帰って来ている」と書かれているのです。それがずっと徳川時代に続いていたのです。秀吉が壊してしまった朝鮮との関係を徳川家康によって良くなったのですよ。そして、徳川が滅びて明治時代になって日本人が朝鮮を植民地化、日本化しようとしたのですよ。日本の歴史ではそういったことまで教えていないのですね。韓国では中学生が習っています。それは彼らの誇りだからです。このギャップは今回の旅行で感じましたね。

■対馬の宗家、マリア夫人

今回、対馬で辛かったことがあります。宗義智さんの奥様が小西行長の長女なのですよ。洗礼名がマリアというのです。不思議なことにこの当時の女性の名前は消されているのです。このマリアさんが対馬の厳原の神社に祀られているのです。これが宗家の殿様が祀られている墓所ですが、奥さんのお墓がないのです。そして、近くに小さな「今宮・若宮神社」というのがあって、祭神は「小西夫人マリア」って書いてあるのです。小西行長が関ヶ原の戦いで負けて石田三成と同様に首をはねられまして、その結果、対馬では彼女も忌み嫌われるのです。当時、忌み嫌われると能を舞い、死者の世界を作るのです。神社というのは死者の世界で崇りが無いようにということで神として祀られたのです。



今宮・若宮神社

■釜山での倭城見学

今回、釜山に行った目的は、小西行長や加藤清正が朝鮮半島で造っていった倭城に行くことで、その一つ「順天倭城(スンチョン・ウェソン)」に行きました。実は倭城が造られた時に、小西行長は宣教師を呼んで兵士たちのためにミサをあげてもらっているのです。それが「順天倭城」ではなく、釜山の近くの倭城だったようです。実は、朝鮮半島に宣教師が入って福音が語られたのは、この戦の時から初めてで、韓国の教会史では 1593 年とされています。当時は順天倭城の周りは堀で近くに海がありました。そういう場所にカトリック教会ができていたのです。ただ、これは日本軍の従軍司祭ですね。

■秀吉の狙いと小西行長の苦悩

秀吉の狙いは、朝鮮征伐ではなく明への戦さだったのです。そのために、朝鮮を通ることと先方になれということだったのです。最初の頃は、鉄砲などの軍備に優れた日本軍が優位だったのですが、朝鮮の人たちが義勇軍となって明の軍隊と一緒に戦うようになり、戦が長引き食糧難や病気などで日本軍は壊滅していくのです。この順天で、小西行長は何をしたかというと、日本軍に協力する人たちの財産や身分は保障しますという証書を出して、そういう人たちは仲間として厚遇した訳です。そういうところに小西行長のキリスト教的な一面は見られるのです。でも、この戦いでは小西行長は相当苦しみながら、内藤如安とともに朝鮮の人たちを殺したと思います。

■朝鮮侵略と文化

ここからが本論です。加藤清正軍の 2 番隊鍋島直茂は陶工 150 名余を唐津に連れてきたのです。ですから、唐津焼や鍋島焼の最初の陶工たちは、この「文禄・慶長の役」で連れて来られた朝鮮の人たちだったのです。そのうちの李参平(りさんぺい)が唐津の山の中で磁器になる土を発見したので有田焼が生まれたのです。ですから、鍋島藩は陶工を地元から絶対に出さなかったのです。拘束するということではなく、経済的にも身分的にも厚遇したと思いますが、絶対に他国(藩)に技術や土を持ち出されないようにここは厳しく管理したのです。さらに 3 番隊の黒田長政、すなわち黒田官兵衛の息子は陶工八山によって高取焼を開窯しています。今も福岡市内の鷹取山の麓、街のど真ん中に窯元がありますね。福岡市には、8 番隊細川忠興が尊耀らによって上野焼(あがのやき)を開窯しました。赤くなる鉄釉が特徴で、表千家では熊谷紅陽が御用達ですが、ここは細川忠興が連れてきた朝鮮の陶工です。4 番隊の島津義弘は 80 名を薩摩に引き連れ、薩摩焼を起こしています。薩摩焼で有名なのは沈寿官さんがいますが、彼の先祖も朝鮮の人で、彼の先祖は国に帰ると技術を伝えたということで殺されるかもしれないので日本から帰ろうとはしなかったそうです。さらに 7 番隊の毛利輝元は李敬兄弟を祖とする萩焼を創り出しました。表千家御用達の坂倉新兵衛は今 15 代ですが、祖先は朝鮮の人なのです。このように慶長の役以降、各地大名が朝鮮の陶工たちをそれぞれの国に連れ帰ったのです。

■陶器に見る韓国の文化

薩摩焼の当代の沈寿官(ちんじゅかん)さんは、故郷韓国に対する敬愛をもって韓国と日本との交流を深められています。そして、沈寿官さんのこだわりは白薩摩ですね。それは、朝鮮の磁器のピンは白磁なのです。ただ、そういったものは王侯貴族しか使えなかった品物なのです。今の韓国料理はステンレスの器で出されるのです。それは何故かと考えると、朝鮮戦争でほとんどの陶器が壊れてしまい、それを忘れないために壊れないステンレスの器が使われているのだと思います。日本国内の韓国料理もそうですね。韓国は器が何故か変わりましたね。それは戦争の後遺症というか、文化だと思います。ここに幾つかのお茶碗を持って来ました。まん中のお茶碗が、韓国の陶芸家の家の縁の下で見つけたお茶碗です。ちょっと傷ついているものに心惹かれると言ってもらってきたもので、金海茶碗といわれる高麗茶碗の一種です。金海の名前は、慶尚南道金海で焼かれ、時に「金海」、「金」の文

字が彫られているものがあることに由来するとされます。胴に猫がひっかき傷のような線がありますが、これを「猫搔(ねこがき)」と言います。これをさらに進めると、「搔き落とし」といって柔らかいうちに削って造られたものです。次が韓国で最初に「人間文化財」になった柳 海剛(りゅう かいこう)さん(1894 年～1993 年)が造られた「雲鶴青磁」です。これは青磁に、他の土を埋めた象嵌です。彼の名前は韓国で知らない人はいないという方ですが、ぼくはまだそれほど有名になられる前にこの茶碗に出会いました。青磁の上に辰砂で絵付けした「辰砂(しんしゃ)青磁」です。火の中で変化して赤い色に変色する技術があるのですが、それが辰砂です。この元々の技術は中国で、朝鮮半島でも焼いていました。ところが途切れていました。日本人でも時々、展覧会で観ることができる程難しい技術なのです。この色は日本人が出している赤の色と違うのです。絵柄は椿です。このように 600 年近く消えていた青磁や象嵌技術が海剛さんたちにより再現され、このように素晴らしい焼き物ができるようになったのです。

■韓国の教会を見て感じたこと

そういう中で、韓国の陶芸界も少しずつですが変わりつつあり、力を付けてきています。ただ、韓国内の経済格差が大きいので、多くの人たちがこうした陶芸を楽しむ環境ではありません。釜山の教会にもたくさんの方々が来ていました。一つの教会で 3 万人くらいの人々が来るところもあります。ただ、そのほとんどが貧しい人たちでした。韓国でぼくが気付いたのは、豊かな人はとんでもなく豊かで、中間層はそんなにいないのです。貧しい人たちが来て、一緒になって賛美歌を唱っていたのです。これはカトリックも一緒でした。ぼくが見たのは、エリートの人たちと貧しい人たちが同じ教会という場所で、同じ賛美歌を唱い、同じ祈りを捧げ、同じ説教を聞いてアメンと言っているのです。

■自分の中に平和を作るお茶

お茶というのは自分自身が自分の中に平和を作ることから始まるのです。一服のお茶を嗜むということは、平和の原点なのです。自分と仲良くすることなのです。これから隣の韓国とお付き合いしていく中で大切なことは、今までさまざまな歴史があるけれども、そういう歴史を知っているからこそ、今日のような「文禄・慶長の役」を経て、さらに時代がぐっとさがって日清戦争以降、朝鮮の人たちに対する日本人の傲慢ぶりを知っているからこそ、改めて朝鮮の人たちに対する「礼(礼節)」を持って付き合うことが大切だと思います。ぼくは朝鮮の人たちに対して「礼節」という言葉を別の言い方でするならば「尊敬」「リスペクト」ですよね。これがこれからの孫や子どもたちに自分の身をもって教えていくことだと思います。

■ぼくにとっての茶の湯

過去の過ちを消すことはできません。傷ついていてる民族、それはぼく自身もアメリカによって傷ついた人間です。ですので気持ちが良く分かります。最初、ぼくはアメリカ人が好きでしたし、ぼくの信仰はアメリカ人によって育てられたものでしたが、ぼくが自立して、5 歳の時のぼくがぼくとして認められたいという思いが今も強く生きていて、アメリカに媚びるということは今はしたくないという思いがあります。日本人は、喰わなくても損しても戦に負けても、神様の御心があるようにという、これはいい加減な信仰のように思うかもしれませんが、信仰の神髄というのは神様の御心の通りになりますよ。ですから、韓国の人たちがずっと平和を願ってきて、今回、どんなことがあったとしても北と南の人が一緒になればいいなあと思いますね。それと国内では、沖縄の基地が誰かが造るのを止めようと言ってきて、結果的に日本から基地がなくなり、兵隊がいなくなることがアメリカのためにも大切なことだと思います。アメリカ軍が撤退したら誰がぼくたちを守ってくれるのかと皆さんは心配されるかもしれませんが、ぼくは自分たちが人を傷つけたり殺したりするよりも、自分たちの死を選びたいと思います。だから、牧師は嫌だと言われるかもしれませんが、ぼくたちは永久の命を持っているのですから、神の国の約束と義をイエス・キリストというお方を通して得ているのですからね。ぼくは、これからの人生においても、人を殺さず、嘘を言わずに、5 歳の時の感動をワクワク感を今も失わずに生きていきたいと思っています。実は、そのことを 5 歳の孫から学んでいるのです。ぼくにとっての茶の湯はそういう世界です。自分自身を毎日リスペクトして、ワクワクするような美味しいお茶を自分のために点て、そして平和に感謝することです。今朝のお茶もそうでした。



金海茶碗



雲鶴青磁



辰砂青磁茶碗